

初期宗教改革における新しい信徒像

—アンドレアス・ボーデンシュタイン・フォン・カールシュタットの木版画ビラ『馬車』(1519年)を手がかりにして—

小田部 進 一

1. 序論

本論文は、ヴィッテンベルクの宗教改革者アンドレアス・ボーデンシュタイン・フォン・カールシュタット (1486–1541年)⁽¹⁾の構想に従って作られた木版画ビラ『馬車』(1519年)を手がかりに、そこに示された彼の新しい信徒像を明らかにすることを目的としている。特にボーデンシュタインの信徒の存在への注目と高い評価が、いかなる歴史的・神学的背景の中で生じたのかを明らかにすることを試みる。この木版画は、書籍出版の歴史から見ると、最初の宗教改革的木版画ビラとして注目される。その際、この木版画『馬車』に印刷された数多くの字句を一つ一つ説明することを目的として執筆された彼による最初のドイツ語パンフレット『解説』(1519年)が、木版画にビジュアルに描かれた信徒像を理解するための重要な手がかりを提供している。この一考察は、ザクセン領邦を追放されるまで(1524年)のボーデンシュタインの信徒主義的宗教改革運動を理解する上で、さらには、彼とルターの全信者司祭性理解における信徒理解の強調点及びその実践における相違を理解するためにも、一つの重要な手がかりを提供すると考える。これらの課題は、本論文の性格を、それが属するボーデンシュタインの信徒像の研究に関する全体構想の中で明らかにするために、ここに指摘されるにとどまる。

2. 本論—アンドレアス・ボーデンシュタイン・フォン・カールシュタットの木版画ビラ『馬車』とその『解説』パンフレットに見られる信徒像

2.1. 教会史的文脈

ルターの講義室の壁を越え、ヴィッテンベルク大学の公の討論の場で扱われ、またニュルンベルクやエルフルトの知人たちにも積極的に伝えられた新しい神学的見解をめぐる議論は、1517年のルターによる贖宥制度に関する『95箇条の論題』と、対抗勢力の反応によって新しい段階に達した。つまり、一方で両側の勢力が印刷技術を用い

(1) ボーデンシュタインは、一般的にその出身地に因んだカールシュタットの通称で知られてきたが、本論文では彼の家系に共通する本名「ボーデンシュタイン」を基本的に用いることにする。

初期宗教改革における新しい信徒像（小田部）

た書籍出版という新しいメディアを通して成立した公の場で論争を開始し、他方でルターをめぐる問題が教會的機関で扱われることになった。ライプツィヒ大学のヨハネス・エックやドミニコ会出身の贖宥説教師ヨハン・テツェルのルターに対する攻撃は、彼にだけでなく、ヴィッテンベルク大学とザクセン選帝侯にも向けられていた。それゆえ、ルターの神学的見解を支持するヴィッテンベルクの改革者たちも攻撃されていると感じた。こうして、ボーデンシュタインも1518年5月9日に『406箇条の論題集』を発表し、ルターとヴィッテンベルク大学、及びザクセン選帝侯を擁護した。この論題集によって、1520年初頭にまで至るヨハネス・エックとの文書を介した論争が始められたのである。

初期宗教改革時代のヴィッテンベルク大学を中心とした神学論争は、二つの主要テーマをめぐって行われた。一つは、神学的論証における権威の問題であり、もう一つは、人間の意志と神の恵みとの関係をめぐる問題であった。前者の論争から教皇権威に対する聖書原理（*sola scriptura*）の思想が発展し、後者の論争では、特に贖宥制度に典型的に見られる「業績主義的」信仰理解⁽²⁾に対する宗教改革的義認思想が展開された。この二つの問いが、ライプツィヒ討論（1519年6月27日－7月15日）においても中心的に論争されたことはよく知られていることである。以下に扱うボーデンシュタインの木版画ビラ『馬車』（1519年3月末あるいは4月初め頃に出版）とその『解説』（1519年4月18日付け）は、この論争的な文脈の中でライプツィヒ討論を目前に出版された。さらに、ボーデンシュタインが、新しいメディアを用いたこと、つまり木版画ビラと、彼にとって最初のドイツ語パンフレットを出版したという事実は、ジャーナリズム的な観点からも、彼がラテン語の出版物に比べより広い読者層に向けて執筆活動をはじめたことを示している⁽³⁾。そして、彼がこれら出版物の中で理想的キリスト者像を、一方で木版画によって、他方で民衆の言葉で提示していることは偶然ではないと思われる。そこに、ボーデンシュタインの牧会的・教育的関心を見ることができる⁽⁴⁾。

2.2. 概観

一枚刷りの木版画ビラ『馬車』（30cm×40.7cm）は、1519年初めにボーデンシュタインの考案に従ってルーカス・クラナッハ（父）が作成した（図1、p.128を参照）。

(2) Bernd Moeller, *Deutschland im Zeitalter der Reformation*, 3. Auf., Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1988, 54頁を参照。

(3) ボーデンシュタインが1518年から1525年までの著作において想定した読者層の変化については、Alejandro Zorzin, *Karlstadt als Flugschriftenautor*, Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1990を参照。

(4) ボーデンシュタインは、大学の教師として講壇に立っただけでなく、1510年以来ヴィッテンベルク城教会万聖財団の聖堂参事会における次席参事会員（Archidiakon）として城教会の説教も担当していた。

後に、木版画の中に数多く配置された様々な大きさの空白の帯に、ボーデンシュタインが考えた言葉や文章がヴィッテンベルクの印刷工房ヨハン・ラウ・グルーネンベルクによって印刷された。木版画『馬車』には、ラテン語版とドイツ語版の二種類が残っている。後者は、前者の翻訳版と考えられる⁽⁵⁾。この木版画は、上部と下部の二層構造になっており、上部は宗教改革的神学の行き方を、下部はそれに対抗するスコラ神学の行き方をテーマとしている。上部の馬車を引く馬上には、司教帽をかぶったアウグスティヌスと特定できないもう一人の人物が見られる。それぞれの頭には、聖人を表わす光の輪が輝いている。それに対し、馬車の上には、一人の髭を生やした壮年が世俗の信徒の姿で描かれており、左端に立つ十字架とキリストに向かって進んでいる。下部に描かれた馬車は、上部とは逆方向の右端で待ち構えている怪物の大きく開かれた口の中に向かっていて、この馬車の上には、上部の馬車に乗る理想的信仰者とは対角線上の位置にスコラ神学を体現する人物が修道士の姿で描かれている⁽⁶⁾。全部で53箇所印刷された章句は、上部と下部のそれぞれ異なる神学的行き方を表現している⁽⁷⁾。

『解説』は、主に木版画『馬車』の上部に印刷された文字を説明した26枚からなるドイツ語パンフレットである。このパンフレットの中でボーデンシュタインは、『解説』を執筆した理由の一つとして、彼のパトロンたちが理解に難しい木版画に印刷された章句の説明を要請してきたことを挙げている⁽⁸⁾。この事実は、信徒である読者たちに神学理念をラテン語ではなく民衆の言葉、すなわちドイツ語で伝達しようとした

(5) 詳しくは、Ulrich Bubenheimer, Andreas Rudolff Bodenstein von Karlstadt. Sein Leben, seine Herkunft und seine innere Entwicklung, in: Merklein, Wolfgang im Auftrag der Arbeitsgruppe Bodenstein [Hg.], Stadt Karlstadt – Historischer Verein e.V. – Evang.-Luth. Kirchengemeinde – Volkshochschule Karlstadt, Andreas Bodenstein von Karlstadt 1480–1541: Festschrift der Stadt Karlstadt zum Jubiläumsjahr 1980, Karlstadt: Michel-Druck, 1980, 19–22頁を参照。

(6) しかし、どの修道会に属するのかを特定できないように、修道士の帽子の形が変形されている。そこには、特定のグループへのあからさまな攻撃を和らげるという配慮があったのではあるが、ライプツィヒのドミニコ会士たちや、エックは、自分たちが下の馬車に描かれていると理解し憤激している。U. Bubenheimer, 同上, 24–25頁を参照。

(7) 以下の叙述において木版画ピラ『馬車』に印刷された章句を参照指示する際、便宜上 E. ミュールハウプトの番号付けに従う。図1参照。

(8) Bodenstein, Auslegung und Erläuterung etlicher heiliger Schriften, so dem Menschen dienstlich und erschießlich sind zu christlichem Leben. Kürzlich berührt und angezeigt in den Figuren und Inschriften der Wagen, Leipzig: Melchior Lotter d.Ä., 1519, [以下 Auslegung と略記] A 2 v: „Dieweil ich aber durch frewntliche gonder vorstendiget / das wenig solche meinung aus den schriefften des obersten wagen fassen können / vnd haben derhalben ein erleuterung begert [...]“ 以下頁数の表記は、オリジナルの表記に従う。その際、頁数の後に表記された „r“ は「表」を、„v“ は「裏」を意味するラテン語の略記である。ボーデンシュタインの著作の多くは編纂されていないのが現状である。そのため以下に、E. フライと H. バルゲによる著作目録、Freys, Ernst – Barge, Hermann, Verzeichnis der gedruckten Schriften des Andreas Bodenstein von Karlstadt, in: ZfB21 (1904), 153–179; 209–243; 305–331 [以下 FB と略記] の番号を表記する。また、ボーデンシュタインの著作が、H.-J. ケーラーの編纂によるマイクロフィッシュ・シリーズ、Köhler, Hans-Joachim – Hebenstreit-Wilfert, H.-Weismann, Chr [Hg.], Flugschriften des frühen 16. Jahrhunderts, Microficheserie, Zug 1978–1987 [以下 Köhler と略記] に収められている場合には、その番号も表記する。ボーデンシュタインの『解説』は、FB15にその所蔵図書館名が、また Köhler / Mf: 1011 / Nr. 2564にマイクロフィッシュとして収められている。

初期宗教改革における新しい信徒像（小田部）

ボーデンシュタインの新しい試みが、彼の側から一方的に行われたのではなく、むしろ読者の要求や提案への応答でもあったことが分かる⁽⁹⁾。『解説』は、騎士階級でザクセン選帝侯フリードリッヒ賢侯の政治機関に属したデーゲンハルト・プフェッフィングアーに献呈されており、ボーデンシュタインは献呈辞の中で、『馬車』を作成した理由を次のように述べている。「私は、混成神学者たちが私を聖書の正しい理解から妨害し、引き離し、キリストが選ばれた者たちの間で何を働いているのか、全く僅かにしか、あるいは何も教えなかったことを、真に不満な思いでしばしば見ていました。それゆえ、まだ先に述べた教師たちに接していない若者たちに、彼らの勤勉と生活をより有益に用いることを熱心に忠告し、思い起こさせることを良いことだと思いました。同様に、先に挙げた教師たちにまだ従っている人たちを、一冊の本を通してそこから連れ出し、純粋な聖書へと導き入れることができることも。……それゆえ、私は一つの譬え、すなわち二台の馬車を考案し、包み隠さず公にしました。」⁽¹⁰⁾ボーデンシュタインが、「馬車」というモチーフに関してアウグスティヌスからヒントを得ていることは、彼の以下の発言から推測できる。「アウグスティヌスは、聖書を正しい医者に導くことができる一台の車に喩えている。」⁽¹¹⁾木版画の上部の馬車は、馬車上の人物を左端に立つ十字架とキリストへと導こうとしている。また混成神学者（die vermischten Theologen）とは、ボーデンシュタインがスコラ神学者を呼ぶときにしばしば用いた名称である。以下に、この名称との関連で、木版画ビラ『馬車』の「対抗」構造を明らかにしたい。

2.3. スコラ神学への「対抗」

2.3.1. 混成神学者

1517年4月26日に公にされた『151論題』の第143論題で、ボーデンシュタインは、

(9) B. ハムは、世俗の信仰者である読者の働きかけを、神学的に教育を受けた執筆者たちの神学的・牧会的意図と並んで、後期中世における敬虔神学（Frommigkeitstheologie）の第三の動因と見なしている。こうして読者である信徒たちが神学者の執筆活動に積極的な影響を与えていたことが注目され、初期宗教改革における具体例をボーデンシュタインの『解説』執筆の動機に見ることができる。Bernd Hamm, Was ist Frömmigkeitstheologie? Überlegung zum 14. bis 16. Jahrhundert, in: Hans-Jörg Nidenen – Marcel Nidenen [Hg.], Praxis Pietatis: Beiträge zu Theologie und Frömmigkeit in der frühen Neuzeit. Wolfgang Sommer zum 60. Geburtstag, Stuttgart: Kohlhammer, 1999, 29–31頁を参照。

(10) Bodenstein, Auslegung, A 1 r: „Ich hab oftftmals betracht vnd warlich mit beschwerung / das die vormueschten Theoligen mich von rechtem vorstandt heiliger schriefften vorhindert vnd abgezogen haben vnd gar wenig / aber nichts / was Christus in seinen auszerwelten wircket / gelernet. Derhalben hab ich fur gut geacht / das ich die iugent / die noch von obgemelten lerern vngewasen ist vnd blasz / vleyssig warne vnd erinner yren vleysz vnd leben / nutzlicher antzulegen / vnnd auch die yhne / so noch obgemelten lerern nachuolig seint / etwan durch ein werck abfuren / vnd in die lauther schriefft gottis brengen mogt [...]. Darumb ich ein clare parabel / nemlich tzwen wagen erdact / vnd vnuorholn lassen auszgeen [...].“

(11) 同上, D 1 r-v: „Heilige schrift vergleicht Augustin einen Wagen / der nicht mer vermack / dan zu dem rechten artzt furen [...].“

「大学の神学におけるアリストテレスの教えは、悪い混合を生み出している」⁽¹²⁾、と主張している。また、アウグスティヌスの『霊と文字』の注解書におけるヨハン・フォン・シュタウピッツへの献呈辞（1518年11月18日付け）の中で、ボーデンシュタイン自身のスコラ神学に対する従来の信頼の過ちを告白したのち、スコラ神学者たちによる神学と形而上学の混合を批判している⁽¹³⁾。これらの発言の背後には、ルターがすでにローマ書講義で用いた、「神学」対「哲学」、また「パウロ・アウグスティヌス」対「アリストテレス」という対置がある⁽¹⁴⁾。しかし、このルターによる「対置」が「対抗 (contra)」という仕方で明確に表現されたのは、ボーデンシュタインの『151論題』が初めてであり、こうして、ヴィッテンベルク大学の改革者グループのスコラ神学に対する批判は「新しい次元」⁽¹⁵⁾に達し、論争神学的な性格が先鋭化され明確になった。

ルターの新しい神学的アプローチから生じたスコラ神学への対抗は、形式的には、神学的論証の権威の問いとの関連で、聖書的・教父的権威とアリストテレスの対抗、内容的には、恩恵と意志の関係をめぐる問いとの関連で、意志の不自由の主張と意志の自由の主張の対抗をその具体的内容としている。この対抗を無視し、形式的にも内容的にも両者を混ぜているスコラ神学者たちのことを、ボーデンシュタインは「混成神学者」と呼んでいる。彼が、スコラ神学者の悪い影響から特に若い学生たちを引き離し、キリスト教的な唯一の源泉である聖書と、その純粋な教えに導くために「二つの馬車」を考案したと言うとき、大学の教師としての教育的関心が見られる。

2.3.2. 意志論争

さて、この神学的「対抗」が、見事にビジュアルに描かれたのが、初の宗教改革的木版画ピラ『馬車』である。上下、新旧、真理と誤謬、そして天国と地獄ではなく、十字架と地獄という対照。さらに、対向する進行方向によって、上下の馬車に座る二人の人物が対角線上に対置され、ダイナミックな正面对決の構図を作り出している。このビジュアルな対抗の背後にある神学的対抗は、例えば両者が交わすそれぞれの神学的スローガンから明確になる。下部の馬車に乗るスコラ神学の自由意志論の代表者の腹部には、「我意」(Nr. 39) と書かれている。それに対して、上部の理想的信仰者

(12) Ernst Kähler, *Karlstadt und Augustin: der Kommentar des Andreas Bodenstein von Karlstadt zu Augustin Schrift De spiritu et litera*, (Hallische Monographien 19), Halle: Max Niemeyer Verlag, 1952, 34*: „Doctrina Aristotelis in scolis theologorum facit malam mixturam.“ (Th. 143)

(13) 同上, 3, 10-16: „[...] sed moestis perstringere querelis altisque proferre suspiriis, quam tetrica seductus opinione veram theologiam sanam denique sanctorum testimoniorum intelligenciam Ex scholasticis doctoribus (illos existimo, qui et theologiam et metaphisycam commiscentes incognoscibile chaos offundunt, cui merito ‚Non novi te‘ Christus diceret), Ex illis inquam doctoribus theologiam hauriendam nanciscendamque credebam [...]“

(14) この神学的プログラムは、後のルターの著作、『スコラ神学に抗して』(1517年9月)、『ハイデルベルク討論』(1518年4月)の中で、より明確な仕方で提示されている。

(15) Kruse, 前掲書, 90頁を参照。

の左肩の斜め上には、「汝の意志が成れ」(Nr. 3) という文字が書かれている。

1518年以降のボーデンシュタインとエックの論争は、意志をめぐる問題によって規定されていた。『406箇条の論題集』の第141論題から第195論題において、ボーデンシュタインは、悔悛の秘蹟的意味を問題としたルターの『95箇条の論題』の第2論題を擁護し、エック及びスコラ神学の立場に対して彼自身の見解を提示している。まず、第141論題で、人間の意志を善行の女王と見なし、人間による内的悔悛を高く評価するエックの見解を非難し⁽¹⁶⁾、それに対抗する論題が後に続いている。「神が意志を動かし、そうして悔悛が生じる」(第146論題)⁽¹⁷⁾。「神が、我々の魂の中で主であり王である」(第156論題)⁽¹⁸⁾。この人間の意志をめぐる議論の関連で、カプレオールスとドゥンス・スコトゥスの名が挙げられている。「かの、つまり、意志を行為の実体と見なす、カプレオールスとスコトゥスは、神に事実上様態を、あるいはわずかな存在しか帰せない。なぜなら、より大きな部分は自分たちに属しているからである……」(第193論題)⁽¹⁹⁾。ボーデンシュタインは、すでに1517年の『151論題』で、創造の恩恵と義認の恩恵のスコラ的区別も、人間的意志による義認の恩恵への適合性の理解も扱っており、これらのスコラの見解を無効と見なしている⁽²⁰⁾。それに対し、彼は善行における神の恵みのみの働きと人間の受動性というヴィッテンベルクの改革者グループに共通の見解を主張している。

木版画ビラ『馬車』の下部の馬車に乗る修道士が右手でかかげる帯の中には、「我々の意志が善行に実体を与える」(Nr. 35) と書かれている。『解説』の中で、ボーデンシュタインはこの主張を『406箇条の論題集』同様、混成神学者としてのカプレオールスに帰せている⁽²¹⁾。それゆえ、読者には、この修道士があたかもカプレオールスで

(16) Bodenstern, D. Andreae Carolstatini doctoris et archidiaconi Wittenburgensis: CCLXX: et apologeticae Conclusiones pro sacris literis & Vuittenburgensibus ita editae ut et lectoribus profuturae sint, Wittenberg: Johan Grunenberg, 1518. [以下 Apologeticae Conclusiones と略記] (FB 3, Kohler / Mf: 987 / Nr. 2504を参照) B 3 v; Valentin Ernst Löscher, Vollständige Reformatiōns-Acta und Documenta, 2, Leipzig 1723 [以下 Löscher, Reformatiōns-Acta, II と略記], 71頁: „Veruntamen cum Eckius in secunda contra nos conclusione, idcirco magnam interiorem fecit poenitentiam, quod voluntatem reginam suorum actuum dicit, ostendit se uel ignorare literas sanctas, uel eis aperte contradicere.“ (Th. 141)

(17) Bodenstern, 前掲書, B 3 v; Löscher, 前掲書, 71頁: „Commouisti terram & conturbasti eam, sana contritiones eius quia commota est. [Ps59 (60), 4] Deus commouet voluntates, & fit contritio.“ (Th. 146)

(18) Bodenstern, 前掲書, B 4 v; Löscher, 前掲書, 72頁: „Vniversaliter loquendo, deus est dominus, & rex in anima nostra.“ (Th. 156)

(19) Bodenstern, 前掲書, C 2 r; Löscher, 前掲書, 75頁: „Illi autem qui uoluntati substantiam actus, ut Capreolus, & Scotus, modum uero seu entitatem minorem Deo attribuunt, quod majus est sibiipsis, quod minus, ne dicam feces, Deo deputant.“ (Th. 193)

(20) Kähler, 前掲書, 18*-20*頁の第44-55論題を参照。

(21) Bodenstern, Auslegung, B 1 v: „Bewar dich vor den vermuschten Theologen / dir lernen / das der mensch guter werck substanz macht. Als Capreolus leret / vnd die christglaubigen verfuert [...]“; 同上, E 3 r: „Mein schulmeistere / die vermuschten Theologen haben mich gelert / sunderlich Capreolus / das vnser will den grund vnd selbstendigkeit heyliger wercken vnd der heyligk geist / weys / form / gestalt vnnd glantz macht.“

あるかのような印象が与えられる。さらに、『解説』において論敵として名指しされているのが、ヨハネス・エックである。ボーデンシュタインは、エックの名を下部の馬車の文字に関連づけている。「自分自身で働くことができる限りのことを行う者は、確かな魂を持っている。」(Nr. 48)⁽²²⁾この意見は、上部の馬車の次の言葉に対置されている。「神が我々の中に、すべて彼が善いと見なすものを創り、実りと根をとまなう善い意志を植えつける。」(Nr. 11) こうして、1517年以降の意志論争において繰り返して示されてきた神学的対抗が、木版画の帯の中にスローガンのように書き込まれていることが分かる。

2.4. 理想的キリスト者像

上下二人の人物が対角線上に向き合って位置する木版画ビラ『馬車』の「対抗」的構図とその論争神学的性格について述べた。そこで、以下に、木版画とそれを解説するドイツ語パンフレットの牧会的・教育的性格について考察したい。これら新しいメディアを通して、ボーデンシュタインは、神学的論争点を伝達するだけでなく、読者に理想的キリスト者像を提示しようとしている。注目されることは、ボーデンシュタインが理想的キリスト者像との関連で特に信徒の存在に注目し、高く評価していることである。彼は、一方で木版画『馬車』の中で、スコラ神学者に対角線上に対置された上部の馬車に座る人物を世俗の一信徒の姿で描き、他方で『解説』の中で、単純素朴な信徒がスコラ神学者たちよりも高い理解を備えていると評価している⁽²³⁾。つまり、ボーデンシュタインによって、「聖書・教父」対「アリストテレス」、「自由意志による協働」対「恩恵のみ」といった神学的対抗の表現に、「信徒」という新しい要素が取り入れられている。これは、ボーデンシュタイン独自の強調点であり、彼の信徒像を理解する上で重要であると思われる。そこで興味深いことは、ボーデンシュタインがいかなる神学的理解を理想的信仰者像によって体現させているのか、あるいは、どのようにして彼はこのような信徒の評価をするに至ったのか、という問いである。ただしこの論文では、木版画ビラ『馬車』に信徒の姿で描かれた理想的キリスト者像に注目し、この関連でのみ『解説』における叙述を分析する。それに対し、上に触れた『解説』の中に見られる「単純素朴」な信徒の理解力の評価についての分析は、他の著作をも考慮に入れなければならないので、次の機会に扱うことにする。

(22) 同上, E 5 v: „Dyser spruch / ist verlecht / durch grunde / des reymenn anfahenden got in vns schafft des obersten wagen. Lasz dich nith kommern / ab gleich her Eckius darwyder mit blossen worten clappert / dan wir werden vnns / in lateinischer tzungem also durchzyhen / das man wol sehen wurt wye weit die Scholaster von der schrift sein.“

(23) 同上, E 4 v: „Daraus volget / das die vngelarten einfeltige leyhen / eins hochern verstants seindt / dan dye gelarten vermuschten Theologen.“

初期宗教改革における新しい信徒像（小田部）

ボーデンシュタインは、アブラハム⁽²⁴⁾や聖アンドレアス⁽²⁵⁾といった聖書的、歴史的人物を模範として挙げている。この論文で、これら一人一人の人物を取り上げることはできない。しかし、『解説』における上部の馬車にのる人物についての描写に、ボーデンシュタインの理想的キリスト者像の本質的内容が総括されているので、まずその内容を以下に紹介する。ただし、彼によるマタイ15:21-28のカナン人の女の聖書記事への参照指示は注目に値する⁽²⁶⁾。なぜなら、最近の研究で、このカナン人の女がキリスト者の模範として語られているタウラーの説教を、ボーデンシュタインが特別な関心をもって読んだことが示されているからである⁽²⁷⁾。そこで、『解説』におけるカナン人の女の記事への参照指示を手がかりに、彼のタウラー講読を、「信徒」対「スコラ神学者」という新しい「対抗」が形成される思想史的背景として解釈することを試みたい。

2.4.1. 「義しい罪人」

『解説』の中で、ボーデンシュタインは上の馬車に乗る人物を「義しい罪人」と呼んでいる⁽²⁸⁾。この名称には、彼が新しく獲得した救済理解が反映されている。彼は、すべての人間が罪人であることを強調している。「義しい罪人」は、己の罪性を認識し、それを神に告白する。己の無力さの告白は、同時に神の恵みへの完全な依存、つまり人間の受動性を意味している。罪人の唯一の正しい業は、己の罪の断罪である。「真理と義を行うとは、罪に蓋をし隠すのではなく、むしろ神の前に明らかにすることである」⁽²⁹⁾。その際、神は人間が己の罪を認め裁くために苦難を送る。悔悛が正しい業であることの根拠は、ボーデンシュタインにとって、人間の正しい行為にあるのではない。むしろ人間を悔悛、つまり正しい業に導く苦難は、神の憐れみにその原因がある。この罪と罰、及び苦難の教育的理解は、『151論題』以来、ボーデンシュタインの悔悛理解の特徴を示している。また、「義しい罪人」は、苦難の中で悔い改める人、それゆえ「悔悛を行い十字架を負う者」と呼ばれている。彼は、神に神の意志が起こるように願う（Nr. 3）。

「義しい罪人」は、しかし、苦難の中にとどまるのではなく、そのような仕方で救いへと導かれる。「義しい罪人」の馬車は、十字架へと向かって走っている。十字架の背後には、キリストが立ち、左と右の両手にそれぞれ文字が印刷された短い帯を

(24) 同上, E 3 v.

(25) 同上, E 4 r.

(26) 同上, A 3 r (欄外): „Hie merck dy historien vom Canineyschen weib Mathei xv.“

(27) Hans-Peter Haase, *Karlstadt und Tauler: Untersuchung zur Kreuzestheologie*, Gütersloh: Gütersloher Verlagshaus Gerd Mohn, 1993, 23-46.

(28) Bodenstern, 前掲書, D 1 r を参照.

(29) 同上, E 2 r.

持っている。これら二つの文字によって、キリストは我意の放棄 (Nr. 31) と十字架を負って従うこと (Nr. 27) を要請している。このキリストの要請が、キリスト者、及び「義しい罪人」の生き様を規定する。上部の絵において、悔悛を行う罪人がこの要請に従い十字架に向かっている。しかし、この道行きの目標は十字架だけでなく、「我々の平和」(Nr. 30) という言葉を胸に掲げるキリストでもある。「義しい罪人」は、己の中に深い罪性だけでなく、それによってキリストの中に平和、つまり、義認および救いを見出す。こうして、悔悛を行う罪人の義認についての新しい教えが持つ逆説的な内容が、上部の絵において独特のダイナミックさをもって描かれている。真のキリスト者は、己を断罪しキリストに信頼する悔悛者である。その際、重点は悔悛と罪の告白というテーマ、そしてキリストによる己の意志の放棄への要請に置かれている。

2.4.2. カナン人の女—アウグスティヌス・タワー受容における「自己放棄」

ボーデンシュタインは、『解説』の中で、枠外の文章を除いた上部の馬車に印刷された30の文字の内、まず十字架の最上部の文字を説明している。「神を報酬を求めずにあせよ」(Nr. 24)。彼は、アウグスティヌスの影響の下、十字架の最上部を自己を求めない神への愛という謙遜な態度として理解している⁽³⁰⁾。その際、『解説』のテキストの欄外で、アウグスティヌスの著作以前に、マタイ15:21-28におけるカナン人の女の記事を参照指示していることが注目される。

アウグスティヌスは、彼の十字架のシンボルの説明において、一度もカナン人の女について言及していない。ただし、この聖書の箇所を扱う彼の説教の中で、カナン人の女は、謙遜の模範として評価されている⁽³¹⁾。「カナン人の女によって謙遜が推奨されている。それは高慢に対する高価な処方箋である。」⁽³²⁾アウグスティヌスにとって、神の前にある人間の認識が問題になっている。まず、神が在り、そして人間がある。まさに己自身を隠すとき、受け取ったものが現れる。自己を隠す、あるいは自己忘却という考えは、アウグスティヌスの謙遜理解に特徴的である。その理解によれば、人は己を健康と見なすのではなく、むしろ己の弱さと罪を認識すべきである⁽³³⁾。ボーデ

(30) ボーデンシュタインは、欄外でアウグスティヌスによるエフェソ3:13-18の説教を参照指示している。この説教の中で、アウグスティヌスは、彼の十字架の象徴的理解について述べている。PL38, 902-907頁を参照。ボーデンシュタインは、1518年の論争的著作『弁護』において、このテキストに基づき、アウグスティヌスの十字架メタファーを展開している。ボーデンシュタインによるアウグスティヌスの十字架メタファーの受容については、H.-P. Hasse, 前掲書, 98-99頁を参照。

(31) PL38, 483: „Chananaea mulier humilitatis exemplum“.

(32) 同上, 487: „Humilitas commendata in Chananaea. Magna contra superbiam medicina [...]“

(33) 同上: „Deus est, et fit homo: seponit divinitatem, id est, quodammodo sequestrat, hoc est, occultat quod suum erat, apparet quod acceperat. Fit ille homo, cum sit Deus: et non se agnoscit homo hominem, id est, non se mortalem agnoscit, non se agnoscit fragilem, non se agnoscit peccatorem, non se agnoscit aegrotum, ut quaerat vel aegrotus medicum! Sed quod est periculosius, sanus sibi videtur!“

初期宗教改革における新しい信徒像（小田部）

ンシュタインがこのアウグスティヌスの説教を読んだという形跡はないが、カナン人の女の教訓的解釈の伝統は知っていたであろう。それに対し、彼がカナン人の女について扱うタウラーの説教を非常に集中的に読んでいたことは明白な事実である。

アウグスティヌスの著作との取り組みに平行して、ボーデンシュタインは1517年から1519年にかけてタウラーの説教を講読していた。H.P.ハッセは、彼の論文の中で、ボーデンシュタインのタウラー説教集の欄外への書き込みの統計表を作成した⁽³⁴⁾。それによれば、カナン人の女の記事が扱われているタウラーの第13説教は、第9説教の次に最も多くボーデンシュタインによる欄外注が観察される説教である⁽³⁵⁾。この第13説教の中心テーマは「自己否定」あるいは「自己放棄」である⁽³⁶⁾。タウラーにとって、自己放棄こそが真に十字架に従う道である。この道は、人間を神へと追い立てる苦難によって始まる。それゆえ、苦難は神の恵みの確かなしるしである⁽³⁷⁾。苦難の中で、カナン人の女はキリストと神に叫ぶ。この叫びは、聖霊が働く嘆息の中で生じる（ローマ8：26）。こうして、人間の魂の「底」が神との一致へと準備される。しかし、もし人が、「あたかも神がそれを聞こうとせず、知ろうとしていないのではないか」と疑うとき、彼は繰り返し「底」に沈潜しなければならない⁽³⁸⁾。このテキストの欄外に、ボーデンシュタインは赤いインクで「自己放棄」(abnegatio)と書き込んでいる⁽³⁹⁾。タウラーは、カナン人の女が自らを「小犬」と称していることに、謙遜と自己否定の態度を見ている。その際、ボーデンシュタインは、己の底への沈潜と自己否定にもかかわらずキリストへの信頼が失われずにとどまることに注目している⁽⁴⁰⁾。タウ

(34) H.-P. Hasse, 前掲書, 26-31頁を参照。

(35) 第9説教には113箇所、第13説教には106箇所に欄外への手書きの書き込みが見られる。第13説教への、異なる色のインクによる書き込みは、ボーデンシュタインがこの説教に一度に限らず、度々従事した事実を示している。同上, 29頁を参照。第13説教については、Tauler, Johannes, Sermones des höchgelehrten in gnaden erleuchten doctoris Johannis Thaulerij, Augsburg: Johann Otmar, 1508の30v-34rを参照。以下「タウラー, 第13説教」と表記する。ボーデンシュタインが所有していたタウラー説教集は、現在ヴァイッテンベルクの福音主義説教者セミナーの図書館が所蔵している。(図書登録番号: H Th fol. 891) タウラーの第13説教の邦訳は、オイゲン・ルカ編・橋本裕明訳『中世ドイツ神秘主義・タウラー全説教集』(第II巻), 行路社, 1991, 236-245頁を参照。ボーデンシュタインが所有したタウラー説教集は、一頁に二つの欄がある。以下、注の頁数及び表裏を示す表記の後に記された「a」は左の欄を、「b」は右の欄を意味する。さらに行数も表記する。

(36) ボーデンシュタインの所持したタウラー説教集に、彼が手書きで作った三種類の索引を見ることができる。その第一の索引におけるラテン語の「abnegatio」(否定・放棄)の索引の中で、タウラーの第13説教の多くの箇所が記されている。索引に関しては、H.-P. Hasse, 前掲書, 32-37頁を参照。このラテン語に相当するドイツ語として「Gelassenheit」が用いられている。それぞれの概念を日本語では「放棄」または「自己放棄」と訳すことにする。

(37) タウラー, 第13説教, 32ra, 8-13: «Hie gegen soldt man demütigklichen eingehen mit danckberkait vnd soldt der mensche des leidn frölichnn baiten. Wann denn ist der mensch sicher. das gott mit jm ist mit seinen genaden.» ボーデンシュタインは欄外に「恵みのしるし (signum gracie)」と、赤いインクで書き込んでいる。

(38) 同上, 32rb, 24-25.

(39) 同上, 32rb, 25.

(40) 同上, 32va, 29-34: «Nam lieber herr, nitt ain hundt mer vil inder. nur ain klain hundlein. Bey disem versincken vnd vernichten jr selbs. Blyb sy in ainem waren versten getrauen zu vnserm herren jhesu cristo.「下線(オリジナルは赤インク)はボーデンシュタインによる。」

ラーにとって、自己放棄の道は、神へと導く癒しの道である。この自己否定によって始めて、神と一つになる⁽⁴¹⁾。さらに、タウラーは、第13説教の中で自己放棄の道を、己と外的な事柄のみを志向するファリサイ人と律法学者の道へのオルタナティブとして叙述している⁽⁴²⁾。つまり、自己放棄と己への信頼という信仰者の態度をめぐる対抗を体現する仕方で、カナン人の女とファリサイ人・律法学者との対抗が見られる。この事実は、ボーデンシュタインが、意志論争における神学的対抗の文脈で、どのようにして信徒とスコラ神学者の「対抗」という新しい構図を作り出すに至ったのか、という問いとの関連で重要である。

以上、アウグスティヌスとタウラーによるマタイ15章のカナン人の女をめぐる理解を見た。両者共に、謙遜の模範をそこに見ているのであるが、アウグスティヌスにおける「自己忘却」と言われている事柄は、タウラーの説教では「自己放棄」と言われ、前者が受動の道を示しているのに対し、後者は否定の道を説いている。ボーデンシュタインのタウラー説教への書き込みを考察するとき、彼が特にタウラーの「自己放棄」の道に強い関心を示していることが分かる。また、ボーデンシュタインの『解説』における十字架の最上部の文字の説明を読むとき、そこにタウラーの第13説教の主要概念、つまり「放棄」、「自己否定」といった概念が全体に響き渡っていることが確認される。『解説』の説明では、神の国が一つのテーマとなっている。ボーデンシュタインは、彼の論敵であるスコラ神学者たちを神の国に己の高い地位と支配権を求めていると非難している⁽⁴³⁾。それに対して、自己否定の態度がオルタナティブとして提示されている。「なぜなら、最も高い神の国において、あなたは己を小さくし、軽視するからである。そしてもしここで真に己の無へと達することができるなら、あなたはここで真に至福となり、神の国となる。なぜなら、神に仕える者は、神と共に支配するからであり...、神と支配するとは、神に仕えること以外の何事でもないから。」⁽⁴⁴⁾つまり、神の国は己を否定する人間の中にすでに存在する。これは、神の意志への服従を意味する。「最高の至福とは、私たちの最高で完全な服従である。服従が、私たちが日々祈る神の国であり、己の働きや願望ではなく、むしろ神の意志の傾聴、認

(41) 同上, 33vb, 39-34ra, 4: „In disem weg vnd in dieser weis geet got blos on alles mitel ein. dz ist. daz man sich sein selbs genntzlich vertzeihe durch gotes willen in allen weisen.“ ボーデンシュタインは、ここで欄外に赤インクで「自己放棄」(abnegatio)と書き込んでいる。

(42) 同上, 30vb, 27-31rb, 7を参照。

(43) Bodenstain, Auslegung, A 3 r: „Dyser verstandt vnd warheit / ist den yenen / zu wider / die das reich gotes / zu eygen nutz vorteyl vnd geferdit suchen / sprechende / tzu kum vns dein reich / dan sie frewen sich / in ewickeit tzu regiren vnd herschen mit got / als / sollten sie tzu dem hochin vnd ampt / wirkliches reichs auffgenommen / vnd sonders end / in wirgklichen mitregiren / bleyben / ab sie sollten / bey sich selbst gros geacht / vnd gehalden werden [...]“

(44) 同上: „Dan im hochste vnd gotlichem reich wirstu dir selbst klein vnd veracht / vnd mogstu / in recht vernichtigkeit dein selbst alhie kommen / wurdestu warhaftig allhie selig / vnd ein reich gots / dan wer got dient / der regyret mit im / als die kirch beth / vnd mit got regiren ist nit anders dan got dynen [...]“

初期宗教改革における新しい信徒像（小田部）

識、そして実行にかかっている。』⁽⁴⁵⁾ボーデンシュタインによれば、神の国は部分的に現在化していると言えるのであるが、この世において完全には実現していない。完全な一致は終末的な出来事であり、現在はその完全な一致に向かうプロセスの中にある。

カナン人の女に話を戻す。タワーの第13説教の中で、この女性は己の意志の受動性および無を告白し、その放棄に努める真の信仰者を体現している。ボーデンシュタインは、『解説』の中で、この女性をテキストの欄外でただ一度参照指示しているだけであり、タワーについては一度も名を挙げていない。にもかかわらず、己の意志に信頼する人間への「対抗」としての自己否定という神学的理解との関連上にあるカナン人の女についての聖書記事への参照指示は、ボーデンシュタインによるタワーの第13説教の、他の彼の説教に比べてより集中的で、複数回に渡る講読という調査結果から単なる偶然とは思われない。ボーデンシュタインにとって、善行に対する人間の意志の不能についての神学的見解との関連において、単純素朴な一女性（カナン人の女）と教育を受けた男性（ファリサイ人・律法学者）との「対抗」は、それゆえ見知らぬ構図ではなかったに違いない。むしろ、ボーデンシュタインは、彼の集中したタワーの第13説教講読によって、我意の否定（Nr. 3）と我意への信頼（Nr. 39）という対立の意味で、木版画『馬車』の上下二つの馬車に描かれた信徒とスコラ神学者の「対抗」という着想を与えられたと十分に考えられる。ボーデンシュタインの信仰者像をめぐる問いに関して、意志をめぐる神学的問題と、信徒の単純素朴さとが結合される一つの重要な接点をここに認めることができる。

3. 結論と展望

ボーデンシュタインは、書籍出版を介した神学論争の文脈の中で、木版画ピラという新しいメディアを用いた最初の宗教改革者である。彼は、ルターの新しい神学的アプローチが持つスコラ神学に対する対立的性格を、明確に「対抗」と言葉で表現するだけでなく、木版画による視覚化を試みた。上部と下部という二層構造、逆方向に進む二台の馬車と対角線上に向き合う上下二人の人物という構図は、宗教改革的神学的アプローチとスコラ神学的アプローチの対抗をヴィジュアルに描いたものである⁽⁴⁶⁾。

木版画『馬車』に印刷された様々な文字から、人間の意志と神の恩恵の関係をめぐ

(45) 同上, A 3 v: „das hochste seylikkeyt. Ist vnser hochste vnnd volkumlich gehorsamkeyt. Gehorsam ist das reich gottes / das wir teglich biten / vnd hangt nit in auszwirkung vnd eygem lust / sonder in einhoren / gewarnemen vnd volbrengung gotliches willen.“

(46) ボーデンシュタインによる木版画ピラ『馬車』に見られる対抗の構図が、後の数多くの宗教改革的木版画プロパガンダの対抗的構造原理の先駆的存在であることが、今日の研究で指摘されている。Harry Oelke, Die Konfessionsbildung des 16. Jahrhunderts im Spiegel illustrierter Flugblätter, Berlin/New York 1992, 225頁を参照。

る神学的立場の相違が対抗させられていることが分かる。ボーデンシュタインは、この神学的対抗に、信徒という新しい要素を加えている。彼は、下部のスコラ神学を体現する一修道士に対抗する仕方で、上部の馬車に、信徒の姿をした人物を座らせている。この人物は、ドイツ語パンフレット『解説』の中で「義しい罪人」と呼ばれる世俗の信仰者の姿で描かれた理想的キリスト者像である。この理想的人物を、ボーデンシュタインは例えばマタイ15:21-28のカナン人の女に見出している。この女性は、アウグスティヌスによれば己を求めない神愛及び謙遜、タウラーによれば自己否定的な謙遜の態度及びキリストへの信頼を体現している。ボーデンシュタインが、このカナン人の女の模範的姿について語るタウラーの第13説教に強い関心を持ち、繰り返し集中的に取り組んだという事実から、彼がタウラーによる自己放棄の態度を体現するカナン人の女と我意への信頼を体現するファリサイ人と律法学者の対抗を知っていたと結論づけることができる。ここに、己の意志の力に信頼する教育を受けたスコラ神学者に対して、我意の放棄の理解との関連で信徒の単純素朴さが評価される一例を認めることができる。

木版画ビラやドイツ語パンフレットという新しいメディアを用いて、ボーデンシュタインが理想的キリスト教信仰者像を提示していることの背後に、対抗的構図に見られる彼の神学的・論争的な関心だけでなく、読者として想定されている彼のパトロンや学生たち、あるいはその他の世俗の信徒たちに対する牧会的・教育的関心をも見るることができる。彼は、理想的信仰者像を一信徒の姿で描くことによって世俗の信仰者階級を評価すると同時に、信仰者のあり方に方向性を与える一つの模範を提示している。この教育的関心は、ボーデンシュタインのドイツ語による執筆活動を引き続き強く規定する要因となる。

ボーデンシュタインは、すでに言及したように、ドイツ語パンフレット『解説』において、教育を受けておらず、単純素朴な世俗の信徒の方が、教育を受けた混成神学者よりも高い理解をもっていると主張している。ただし、この発言の文脈では、聖書及び聖書の教えの理解が問題になっており、この文脈でも、ボーデンシュタインが世俗の信仰者、特にその単純素朴さを高く評価していることが分かる。この評価については、ライプツィヒ討論後の彼のラテン語による著作『神の言葉』(1520年)⁽⁴⁷⁾で詳しく扱っており、その検証はさらなる研究課題として残る。

(47) Bodenstein, Verba Dei quanto candore & quam sincere praedicari, quantaque solitudine universi debeant addiscere. Carolostadius. Contra D. Ioannem Eckium, qui manifestarie dixit, aliud dicendum theologistis, aliud gregi Christiano, aliud in schola, aliud in ecclesia [...], Wittenberg: Melchior Lotter d. J., 1520. (FB26と Köhler / Mf:1048 / Nr. 2650を参照).

初期宗教改革における新しい信徒像 (小田部)

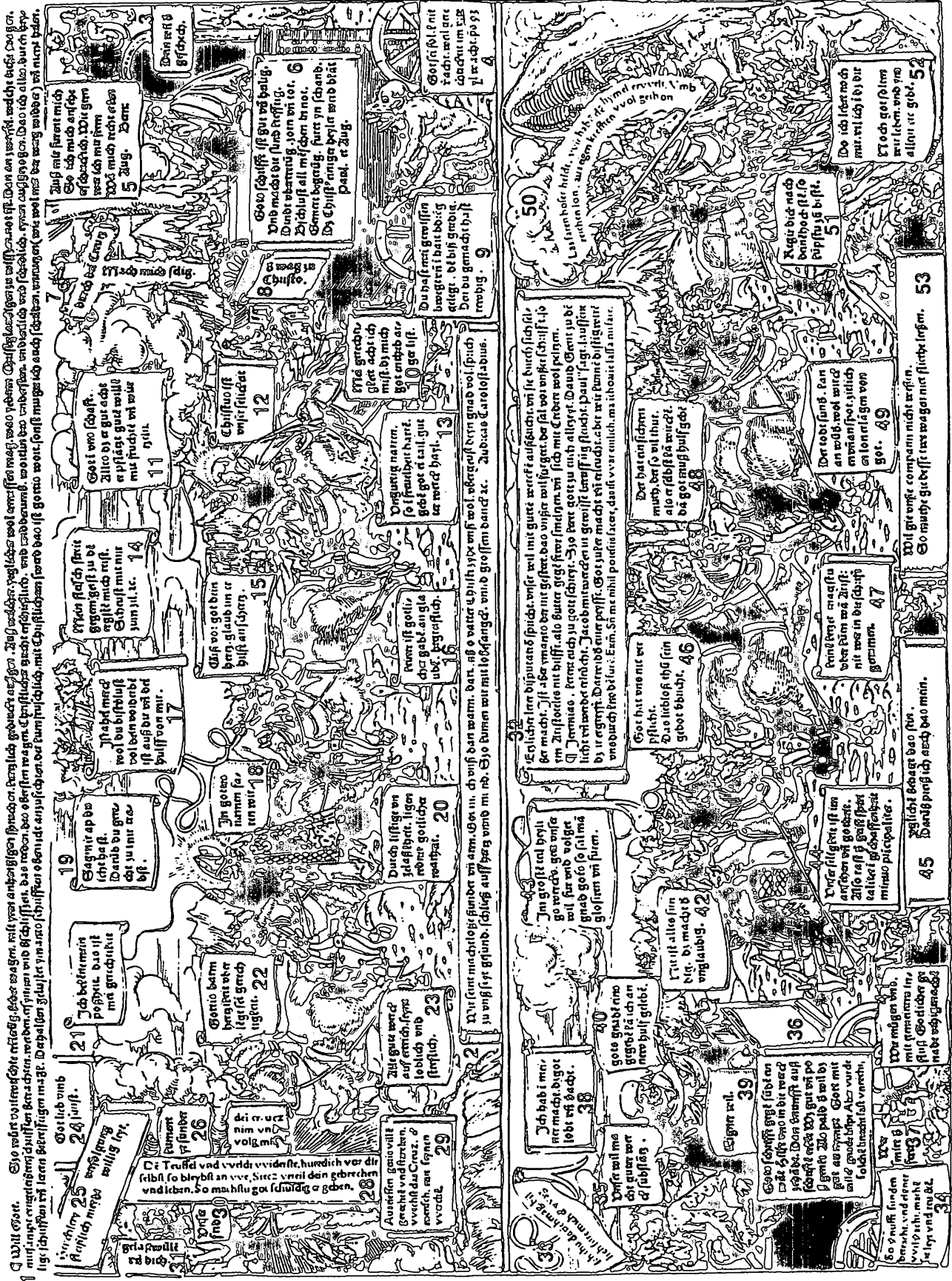


図1 アンドレアス・ボーデンシュタインによる木版画ビラ『馬車』(1519年)
 (出典: Erwin Mülhaupt, Karlstadts „Fuhrwagen“: Eine frühreformatorische
 ‚Bildzeitung‘ von 1519, in: Luther50 (1979), 60/61頁)